

メール通信 [No.21 /05/07]



< 祇園祭宵山 >

今年の祇園祭りは、宵山が土曜日とあって、50万人の人出、32基の鉾が立ちならぶ山鉾町一帯は、歩行者天国となって人並みで埋まり、歩くのもままならない。団扇を片手に慣れぬ裾捌きの娘さんたちのゆかた姿は、夏祭りの風情。お囃子の音に乗っ

つ

て鉾に上がると古来のタペストリーの絵柄は異国模様。鉾は町内の宝物。お囃子の鉦や太鼓を鳴らし、

巡幸の鉾を引くは町衆の晴れ姿。

鉾町を歩くと、通りに面したお店が障子を開け放ち、自慢の飾りを見せてくれる。お宝は家によってさまざまだが、それぞれに由緒がありそう。観光客のために飾るのではないから解説はない。通りすがりに見せてもらうだけ。奥の間では、近しいひとを招いての団欒。中には芸子さん、舞妓さんが入ったの宴席も見かけた。古き良き時代の名残か。これはエトランゼには入れない内々の世界。祇園祭り宵山は、鉾町に住むひとびとの自分たちのための夏祭りなのだ。



< オープンハウス >

「今年の宵山はオープンハウスです。」京都通信社の中村基衛さんから案内をいただいた。中村さんは、室町御池の町家。2階をオフィスに、1階の和室は

談話室。酒を持参する人があれば、いつでも鍋が始まる。
いつもの鍋奉行の中村さんに代わって、今夜は、民族学の石毛直道先生が
お座りで、お聞きすると、最近の著作は「失われたちやぶ台」とのこと。
飲めば飲むほどに話題は広がる。先生の食文化の蘊蓄に花が咲いて、今年の
宵山の夜は更けた。

祇園祭の宵山は、こうした町家を舞台に、京都コミュニティが生き生きとした
姿を見せるハレの日なのだろう。

来月は上京の町衆の大文字の送り火。京都の町屋はいそがしい。